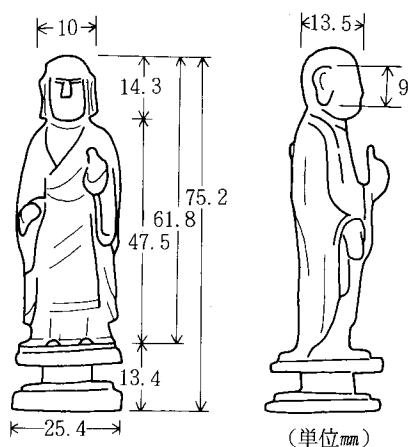


付1 山王地内出土の地蔵菩薩立像について



挿図21 地蔵菩薩立像概念図

今年度の発掘調査地内E区(2780番地)より、昭和34年頃発見されたと伝えられる地蔵菩薩立像を実見する機会を得たので、ここに観察事項を記すことにする(図版7参照)。

緑青の色鮮やかなブロンズ像で、やや赤味をおびることからみて若干の金を含んでいるものと思われる。尊像は頭部を僧形に作り、右手は垂下して与願印を、左手はあげて忍刀印に結んだ、地蔵菩薩像である。像の本体を側面から見ると、ややずんぐりしているが重厚さがあり、しっかりと整っている。面相は小さいながらも彫りが深く、耳は長く奥行き深く作られ、ボリュームをもつて

いる。身にまとう衣は厚目に表現され、衣皺を省略して凹凸のみで処理されているため、衣紋の個性は感じられない。しかし反面背面にも衣皺の凹凸が見られ、右手、左手に垂れる衣の縁取りは小さいながらもダイナミックなリズムをもつ。

台座は軸をはさんで上下に円形の座を作り、框を置くことによって蓮弁の表現を省略している。台座に蓮弁が施されない例として、高崎市竜光寺の菩薩像(奈良時代)をあげることができるが、古い時期の蓮弁表現をもたない台座の特徴として、上下の座の径の差が比較的少ないことが指摘される。また、手印で見られる限り、義軌上の印相とは異なっており、忍刀印の表現から顕密的因素が濃厚に入っていることが窺われ、古典的な印相ともいえる表現方法をとっている。

以上のことから本像の製作を藤原時代中期と推定する。根拠として①衣文に翻波式が見られないこと、②面相は貞觀期の特徴をもつこと、③尊像のずんぐりしたボリューム観は貞觀期末から藤原前期の特色であること、④衣皺の動的な表現は藤原時代中期の天部像に顕著であることがあげられる。

部 位	法 量	部 位	法 量
面 上 張	8.8	足 幅	9.8
面 下 張	8.1	胸 奥	12.3
肩 張	18.0	腹 奥	13.4
肘 張	22.4	裾 奥	10.8
袖 下 張	20.0	総 奥	16.8
裾 張	16.4	敷 茄子丈	5.1

表 細部計測値(単位mm)

また、尊像は念持仏として祀られていたものと思われ、早期の地蔵信仰を物語る貴重な遺品である。(総社町総社2412 都丸甲子郎氏所蔵)

○重 量 112.6g
○材 質 銅